

KOBUNSHA BUNKO

ザ・サヴァイバル

地獄からの生還

文庫書下ろし・長編ハードアクション小説

おお やぶ

大藪春彦



長編ハードアクション小説・書下ろし

ザ・サヴァイヴァル

地獄からの生還

著者 ^{おおやぶはるひこ}大藪春彦

昭和61年12月20日 初版1刷発行

発行者	大坪昌夫
印刷	大日本印刷
製本	大日本製本

発行所 株式会社 光文社

〒112 東京都文京区音羽2-12-13

電話 東京 03 (942) 2241(代表)

振替 東京 6-115347

© Haruhiko Oyabu 1986

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN4-334-70461-1 Printed in Japan

光文社文庫

文庫書下ろし・長編ハードアクション小説

ザ・サヴァイヴァル
地獄からの生還

この作品は光文社文庫のために書下ろされました

目次

プロローグ	5
第一章 周期性四肢麻痺 ^{まひ}	6
第二章 山へ	66
第三章 消された墓碑名	82
第四章 疑惑	110
第五章 M・I・A (ミッシング・イン・アクション)	127
第六章 ザ・サヴァイヴアル・トレーニング	162
第七章 緊急脱出	225
第八章 ハノイ・ヒルトン・ホテル	245
第九章 白い粉	298
エピローグ	342

解説

野崎六助

345

プロローグ

亜熱帯にありながら、ラオスの秋は思ったより過ごしやすい。それは、午後になるとメコン河を通りぬける風がこの高台まで通るからだ。

その日——一九八六年十月二十八日——、いつもは人影のない高台に、ラオス軍将兵と米国旗を胸につけた数十人の一団が、クレーンで吊り上げられる航空機の残骸を見守っていた。やがて、上半身裸の作業員の合図と共にその残骸は静々と吊り上げられる。十数年間地下にめり込んでいたとは思われないそのジュラルミンの機体は午後の陽光を受けてまばゆいばかりの光を放っていた。

特に、その機体からサラサラとこぼれ落ちる白い粉は、南国に舞う雪のようであった。

第一章 周期性四肢麻痺^{まひ}

1

窓の向こうに暮色の街が果てしなく広がっている。

高層ビルの外壁が残照を受けてキラキラと光を放っている。街は深く沈み込んでいる。

星島^{ほしじま}弘^{ひろし}は雲の切れ間から射し込まれる残照に目を閉じる。高層ビルが真っ赤に燃え上がる。

眩^{まよ}しい……思わず顔を覆^{おほ}おうとする。しかし星島の手は胸のあたりまでしかあがらなかった。

ブルブルと身体を震わせながら必死でなおもあげようとするが、意志の力に反して手は動かない。

「……………」

星島弘の唇から獣^{けもの}のような低い呻^{うめ}き声が漏れる。残照は容赦なく星島の顔を射る。真っ赤に染まったその顔は、かつての星島の顔ではなかった。頬は削^そげ目は落ち窪み、肌には生氣がなかった。かつての星島を知る人が見ても彼だと思ふものは誰一人いないだろう。まるで老人が座っているように見える。

残照は容赦なく星島の顔を射る。頭の中が真っ赤になる。血が逆流して頭の芯にドリルを差し込まれたような激痛が襲う。

「畜生、畜生……」

星島は声にならない声を絞り出して呻く。

力がこもらない足が宙を蹴る。ただ車椅子がぎしぎしと不気味な音をたてるだけだ。渾身の力をこめて肘で車椅子のブレーキを外す。

星島は肘を使って車椅子の車輪を押し、狂ったように部屋中を走りまわる。リノリウムの床と車輪のタイヤがこすれあって、ぎしぎしと悲鳴をあげる。

頭の中が空白になる。モヤがかかったように目の前が真っ白になる。何も見えない。全てが終わりだ。唇からニガリのような胃液がリノリウムの床の上に撒き散らされる。

狂ったように車椅子は病室の壁に激突する。もんどり打って車椅子から投げ飛ばされた星島は、自分の吐いた汚物の中に顔から落ちる。餓えたような臭いのする汚物が容赦なく口に入ってくる。今の星島には、それを拭う気力も体力もなかった。

突然、最後の残照が落ちた。

濃密な闇が病室を包む。星島は汚物の中を身体をよじりながらベッドに這い寄る。

「外が見たい」

星島は呻くように叫ぶ。

やっとのことでベッドに登った星島は、手さぐりでベッドのリモコン・スイッチを押す。

ぎしぎしと音をたてながらゆっくりとベッドのヘッド・ボードが上がる。闇の中から震れた星島の顔が浮かび上がってくる。

さっきまで、真っ赤に燃え上がっていた高層ビルは、ダイヤモンドをちりばめた箱のような光を放っている。

形式的なノックのあと、個室のドアが勢いよく開き、

「星島さん、灯りもつけないで、もうまったく」

と、言いながら看護婦の中村^{なかむらさえて}冴子が入って来た。

「……………」

怪鳥のような悲鳴をあげて星島の吐いた汚物に足をとられ、彼女は思いきりリノリウムの床の上にひっくり返る。

「星島さん、発作が起きたんですか？　大丈夫なの？　すぐ先生を呼びますから」

中村冴子は悲鳴に近い金切り声をあげて、ナース・ステーションに吹っ飛んで行く。

激痛と発作で苦しむ星島とはまったく無関係に、二十八階の病棟は静まり返っている。天井の蛍光灯が人氣のない廊下に虚しい光を投げている。

看護婦が走り込んだナース・ステーションのドアがゆっくり閉まる。あたりの空気は雪が積もるように動きをなくす。

音の反響を避けるよう配慮された病棟は白い巨大なトンネルのようである。

だが今の星島には、わずかな空気の動き一つが苦痛であった。発作が起けると身体中の全神

経が体表近くに浮き上がってくる感覚があった。むき出しの神経には自分の吐く息で動く空気を耐えられないほどだった。

この巨大な三十階建ての威容を誇る国立総合病院センターは、代々木の森をバックにその巨体で周囲を圧倒するかのようになびき立っていた。白い外観に似合わず、内部は医師たちの権力争いと金に執着する亡者どもの巢窟と化している。

医局は東大出身者が主流を占めるとはいえ、各医大から若手・中堅クラスの医師たちが集まって来ている。若い研修医たちは、医薬品を納入にくる製薬会社のプロパー相手に金を出させるほどの才覚はまだ身につけていない。四十の声をきいてそろそろツラの皮の厚くなった先輩たちとプロパーの駆け引きをやっかみ半分で眺めているしかない。先輩が外へ出て席があくのを待つ間、若手研修医たちはアルバイトで生活費を稼ぐ。

各医局の研究室には、三人までの研究員費が割り当てられている。研修医たちはこの研究費を頭数で割って分けるのだが、一円の端数まできっちり割る。そして、足りない分をアルバイトで補う。とはいえ、地方の総合病院の当直を週に一昼夜やれば夫婦二人は楽に暮らせるほどの実入りがある。

人脈金脈をうまく使いこなして手っ取り早く地位と金と名誉を手に入れる。こうなればあとはお望みしだいだ。要はサル山のボス争いと原理は同じだ。ボスに取り入ったものが栄達にありつけるといふわけだ。

特にこの二十八階の特別病棟は、医師たちにとって金の卵を生む場所と言える。この個室

に入院できるのは国会議員、有名実業家、芸能人、札束で医者、横ッラを張れる者たちである。星島がこの特別病棟に入院できたのは、腐敗しきった医学の世界にも難病に取り組もうという真剣な医師がいたからだ。

星島が、薬物も服用しないのに発作を起こしたのは、カナダからの帰りのユナイテッド航空機の中であつた。

客席に配られた夕食をとっている時、突如として手足が動かなくなったのだ。特に足の麻痺がひどかつた。意識ははっきりしていた。

パニックに襲われた星島は悲痛な声でスチュワードスやスチュワードを呼んだ。

星島が症状を訴えると、乗客たちの中に乗り合わせていた医師が呼ばれた。しかし外科医の彼は、星島に対して何の治療を行なうことも出来なかつた。

機が成田に着くと、星島は担架で救急車に乗せられ、近くの病院に運ばれた。

その病院の当直医はどう処置していいか分からないらしく、とりあえずリンゲル液を星島に点滴した。

その時は、それだけで治つた。

退院した星島は日常生活に戻つた。この病気の特徴は、発作が起こっていない時は健康人と同じように手足が動かせることだ。

帰国して十日たつてから、星島はアジトに一人でいる時またまた発作を起こした。両腕はわずかに動かせたが両脚はまったく動かすことが出来なくなつた。

発狂しそうな思いで、肘を使って電話機のところまで這っていった星島は、やっとのことで一一九番を呼ぶことが出来た。

中野の救急病院に送り込まれた星島は原因不明の奇病ということで片付けられ、それからあと、何軒かの救急病院をタライ回しにされた。

発作がおさまっている時、星島は病院を抜け出して、古くからの友人である赤羽の吉田^{よしだ}外科医に相談に行った。

星島の話を中心聞いていた吉田は、これは相当な難病だ。私も長い医者生活の間に、たった一度だけそうした女性のクランケを扱ったことがある。しかし、どうしても手に負えず東大病院に送るほかなかった。

いずれにしても神経系統がやられていることは間違いない。こうした病気に興味を持っている医師がいるから紹介しよう……。

こうしたことから星島は、この特別病棟で治療を受ける身となった。星島が今横たわるベッドを担当している医局は、東大出身の西山^{にしやま}という医師が長を務めている。

この西山という男は国立総合病院センターの七不思議の一つに数えられている男だ。金と権力欲が渦巻く世界にいながら、研究に没頭した生活を続けている。

それでいて不思議と人望があつて、優秀な人材が集まつて来る。西山の研究室などに何年いても、西山自身は研究員の面倒など見てやる男ではないことは分かりきっている筈なのだが。

他の医局のボスどもも、西山の前に出ると、つい日頃の駆け引きを忘れて素の生地^{きじ}を見せて

しまう。自分では一行たりとも書いたことがなく部下に論文を書かせて、学会の研究発表を行なっていることや、薬の横流しや看護婦に手をつけたことなど、西山にはすべて知られているような気がするのだ。白衣を着て研究室にいなければ、誰も医師だとは思わないほど風采のあがない男が西山であった。

しかし、神経内科の分野では、西山は傑出した業績をあげていた。少しでもあいまいな研究論文や治療報告に対しては容赦がなかった。そういう時だけは赤く濁った眼に異様なまでの力がこもる。

星島は西山に初めて会った時、西山が権力欲を発散させていないのでかえって不安になった。肩書一つあるかないかで実入りの違う世界で、金に欲を見せない男が信じられなかった。研究バカのモルモットになってやる気など毛頭なかった。

しかし、昔からの知り合いの吉田が、

「一度とにかく診^みてもらえ」

といつになく強い調子で言うのに動かされたかたちになった。

どこの病院でもやった同じ検査をまた受けさせられ、星島は内心、西山を信じていなかった。カルテには、例によって、「原因不明の奇病」とのみ記されるのが落ちだろうと思った。しかし西山は星島のカルテに、「周期性四肢麻痺」と記入した。

星島の表現のしよのない苦痛に名前が与えられたのである。病名がついたからといって、苦痛が去ったわけではないが、漠とした不安からは解放された。

これはあとから知ったことだが、簡単に言うならば、周期性四肢麻痺とは、身体の血液中と細胞中のカリウムが急速に減少することから起る。減少の引き金になるものが何かは、現代医学では突き止められていない。

だが、おぼろげながら分かりかけてきたことは、カリウムが尿といっしょに体外へ排泄されるか、または、急激な運動量の変化により血液中のカリウムが急速に細胞内にとりこまれてしまうせいではないかと言われている。

通常、健康人にとってカリウムはほとんど気にする存在ではないが、実は身体の筋肉を動かすという最も大事な役割を果たしているのがこのカリウムである。カリウムが減少することによって、四肢の筋の細胞膜は興奮性を失い、いっさいが動かなくなるといふ事態に陥る。

西山の話によると、アメリカの神経学会の報告には、高速道路での運転中や飛行機の着陸中のキャプテンがこの病気に襲われたという例が数例あるという。

高速道路を走っていたドライヴァーは時速百マイルで走行中に突然両腕に麻痺がきて、そのまま防音壁に激突してしまった。飛行機のキャプテンは、機首を下げ完全に着陸体勢に入った時にこの発作に襲われた。勿論コウ・パイロットのカバーで大惨事はまぬがれたが、機体は滑走路をオーバーランし大破した。

特に最近N・A・S・Aでは宇宙空間においてこの病気が発生することを恐れており、ラングレー宇宙医学医療センター(S・M・M・C)で集中的な研究が行なわれ、血管中に百万分の一ミクロンというセンサーを埋め込むことに成功、血液中のカリウムが三ミリ・イクイヴァ

レント以上減少するとリセプターが反応する装置を開発した。

センサーが反応するとクランケはただちに医師の指示により細心の注意をしながらカリウム注射またはカリウム点滴、あるいはカリウム溶液（濃度九十パーセント）を服用することにより発作から離脱することが出来る。

この周期性四肢麻痺の原因については諸説があり必死の追究が行なわれているが、何しろ患者が四万人に一人という発生率のため臨床例が少なく、適切な治療法の発見には至っていない。発作は過食後や長時間座った後で起きることが多い。全身の筋の脱力は肩や腰部から始まり、手指や足の先端へ広がっていく。

軽い場合には安静にしていれば早くて三時間、遅くて半日で元に戻る。やっかいなのは上半身にくる発作で、呼吸筋が麻痺し死に至ることもある。

星島の場合は上半身にも下半身にもくるタイプで特に下肢の麻痺がひどい。通常なら四ミリ・イクイヴァレントあるカリウムが、発作が起きた時には一ミリ・イクイヴァレントに下がり危険状態を引き起こしかねなかった。だから星島の場合は、時には三十分おきの血液採取により血中のカリウム濃度はモニターされた。そのため両方の腕の血管は針がくい込めないほど固くなっている。

今では点滴用の針を使って手の甲の柔らかい部分から採取しているありさまだ。それに三日に一度は危険な発作を起こして、I・C・U（集中治療看護室）に運び込まれる。

主治医の山村恵子^{やまむらけいこ}を先頭にして三人の医局医が病室のドアを勢いよく開けた。山村恵子は、心なしか青ざめた顔をしている。彼女は今年の春、国立の医大を卒業して研修医として神経内科にまわされて来た。そんな新米の彼女が主治医として初めて担当したのが星島だった。

恵子は一抔^{ちゆう}の憂い^{うれ}を含んだ美貌と素晴らしいスタイルの肉体を持っていた。

初めて病室で星島と会った日、頬に小指を当てて口の中でもごもご言ったのち、

「よろしくお願いします」

と、最後の言葉だけははっきり言った。

星島は看護婦だとばかり思っていた彼女が主治医だと知って、深い失望感を味わった。こんなに若いしかも大学を出たての女医では、いかに美しくても頼りがないというのが正直なところだ。

しかし、その印象は見事にくつがえされた。やがてそれは彼女の必死の取り組み方で分かった。医局医の中でも最もベテランの豊田はぶ厚い眼鏡をずり上げながら、山村恵子ともう一人の医局医、野中^{のなか}にてきはきと指示を与える。

「すぐ10ccの血液を採血してくれ。脈搏呼吸ヴァイタルをチェックしろ。ナース・ステーションに連絡して心電図チェックのマシンを運ぶように言ってくれ」

星島は汚物にまみれたまま、放心したように医者動きを眺めていた。目の前で起こって